

## はじめに

たまたま送られてきたアナキストの雑誌『トスキナア』17号（二〇二三年六月）をめぐっていると、思いがけない写真版に出合った。

魯迅四九歳の時ののはじめての児海嬰カイエイの「生後十六日像」（48×40・油彩、秋田義一画）だ。ふとんを胸までかけた赤児が無心に眠っている。——そういえば、魯迅日記一九二九年一〇月一二日の項に、〈昼すぎ、秋田義一來る。海嬰のために絵を描いてくれる、十五元貸す〉というくだりがあったが、〈海嬰のために〉ということが海嬰を描くことだとは思ってもみていなかった私は、この絵の存在に、軽い衝撃を受けることになった。

今まで幾種類かの魯迅の写真集を見てきたものだが、この絵はそれらのどこにも載っていないかった。だが、これは私が目にする機会がなかっただけのことだ、この絵は、すでに『魯迅と内山完造写真真集』には収録されているということだし、絵画そのものは、上海にある魯迅旧居

の三階の客間かはずっと飾られていて、見学に訪れれば目にすることができたらしい。いかにせん、とても脚の悪い私には上海の魯迅旧宅を訪れる機会はありませんので、その現場で「海嬰生後十六日像」に出会うことなどできるはずもなかった。

だが、小さな写真版ではあっても、この嬰兒の姿をみていると、いろいろなことが思われてくる。——子どもが生まれ、やがてこの子が成長するにつれて、父親としての魯迅の心は、どんなに豊かになっていくか。今はただ眠っているだけの嬰兒は、はかり知れない可能性を内に秘めていて、そこにいるだけで、魯迅にやわらかに力を与えていく。

上海の内山書店で魯迅に出会ったある日本人は、わが子が「魯迅さんの椅子」に腰掛ける魯迅の膝の上に載せてもらったことを心に刻んでいるという。こんな自然な展開も、父親でもある魯迅のみせる一面だ。

魯迅小父さん！

一九三二年生まれの私は、「満洲国」鉄嶺に生まれて以来、ずっと中国東北部と関東州で育つことになった。魯迅小父さんに会って高い高いをしってもらうめぐり合わせはなかったが、ずっと中国大陸の地つづきの場において、魯迅と同じ空気を呼吸していた。魯迅小父さんが亡くなる日、一九三六年一〇月一九日まで。

だがしかし、ここで甘やかな話をしようというのではない。

魯迅の「徐懋庸ジヨボウヨウに答え、あわせて抗日統一戦線について」（一九三六年八月五日）の文中の次の言葉は、私をさし貫かずにはおかない。

政党が、全国人民に提出した抗日統一戦線の政策は、わたしは見た、わたしは支持する、わたしは無条件にこの戦線に加入する。その理由は、わたしが、一人の作家であるばかりでなく、一人の中国人だからである。だから、その政策は、わたしにとっては、非常に正確だと認める。

私はといえば、〈抗日〉というときの、その当の日本人の一人なのだ。この時点での私は四歳の幼児にすぎないけれども、関東州庁に任命される立場の、金融組合理事である父の養育を受けて育っていたのだった。

魯迅小父さんは、いきなり日本人というだけの理由で日本人を敵視するような人ではない。しかし、日本の国家が中国の大地をじりじりと侵していくさまをずっと注目追跡し冷静にとらえている。

そのような魯迅小父さんの姿を他人ごととして見ることはできない。その眼なごしはヒリヒ

りと痛い。でも魯迅小父さんが硬骨漢であることと、とても人間らしくやわらかな思考の持ち主であることは、その日常の着実な進め方を見ればわかってくる。その自然な日常を追うために、これらの文章はおのずと編年体の形式になった。

『そこにいる魯迅——一九三二年～一九三六年』は、研究論文ではない。だがこの文章には、他の人が触れてこなかったこともあるはずなので、そこを伝えておきたいと思う。